

## 優秀賞

絵本を通じて「自然」を感じる

小林 登喜代

柳田邦男先生、ご無沙汰しております。今年は非常に暑さも厳しく、自然災害も多い夏でしたが、お変わりありませんでしょうか。私はお蔭様で元気に過ごしており、今年もまたこうして先生にお手紙を書くことができ、ありがたく感じております。

私は、今年の4月に育児休業明けで復職しました。部署が変わり、妊産婦さんとはあまり接することがなくなりましたが、絵本の素晴らしさを友人に話す機会に恵まれ、絵本好きの友人が増えました。子ども達は、長男が小学校に入学、長女は年中へ進級、そして次女は0歳児で保育園に入園

と、それぞれが新しい環境で楽しく毎日を過ごしています。幼い頃から絵本好きの長男は、学校図書館が大好きで、絵本はもちろんのこと、いろいろな読み物をとて真剣に読んでいます。ひらがなが読めるようになった長女は、自分で読むことが楽しいようで、お気に入りの絵本を繰り返し読んでいます。また、保育園で読み聞かせをしてもらった本を良く覚えていて、一緒に図書館へ行く時、面白かった本を覚えてくれ、一緒に楽しんでいます。1歳を過ぎた次女は、ページをめくることが大好きで、好きな絵を指差して教えてくれます。絵本や本が毎日の生活に欠かせないくらい好きな子ども達の姿を見るにつけ、お腹に居るときから読み聞かせを続けてきたことは、間違っていないと確信しています。本当に「絵本の力」

は偉大ですね。

さて、前置きが長くなりましたが、この1年もまた、非常にたくさんのお素敵な絵本との出会いがありましたので、ご報告させていただきます。

特に、今年には児童文学作家の加古里子さんが5月に亡くなったという事をニュースで知り、改めて子ども達と一緒に「かこさとし」さんの絵本を読みました。読みながら、私も小さい頃「からのパンやさん」が大好きだったなあなど、幼い頃の記憶がよみがえり、同じ本を子どもに読み聞かせている事に自然と感謝の気持ちが沸き上がってきました。子ども達に、母である私も同じ様に幼い頃があったのだと言う事を一緒に伝えられたり、子どもの頃を感じたことを伝えられたりと、世代を超えて読み継がれる本は、本当に素敵だと感じ

ました。

また、加古さんの絵本は物語だけでなく、様々な自然をテーマにしており、子どもの頃に読む機会のなかった本も随分と読ませて頂きました。その中で、特に心に残っているのが、「かわ」という絵本です。川とはどのように発生しているのか、また、山奥の暮らしから、川を下りながら様々な地域での暮らしを読み取ることができ、子ども達もとても興味深く絵を見て聞いていました。自然の素晴らしさを、絵本から感じ取ることができました。昨今の環境問題や地球温暖化のことまで、この絵本をきっかけに家族で考える機会にもなりました。

我が家では、朝日小学生新聞を購読しているのですが、8月の記事に、この秋にかこさとしさん

の遺作、絵本「みずとはなんじゃ？」が刊行される予定というものがありません。暮らしの中にある身近な水を通して、その性質や自然環境に目を向けるきっかけになるような内容であるということです。今から刊行が待ち遠しいです。

まだまだ読みたい絵本が沢山あります。様々な気付きを与えてくれ、人生を豊かにしてくれる絵本の存在は、本当に宝と感じます。

自然の中で生かされている事に感謝し、社会の中で役立つ自分を目指して、今日からまた毎日を楽しんで過ごしたいと思います。

### 〓 柳田邦男先生からのメッセージ

今時、三人の子どもを育てるのは、とても大変

ですが、そんななかにあっても、子どもたちに絵本の読み聞かせをしているということが、子どもたち一人ひとりについての記述から伝わってきます。

小学校一年になった長男は、学校図書館が好きで、はやくも読み物を、自分で選んで真剣に読んでいる。保育園児の長女は、ひらがなを読めるようになり、絵本を自分で読んでいる。一歳の次女は、はやくも絵本の好きな絵を指で教えてくれるという。

このような早い成長の根っこはどこにあるかというところ、お腹に居るときから読み聞かせを続けてきたこと」にあると書いています。私もそう思い

ます。

胎児は、まだ絵本を見ることができないし、言葉もわかりません。にもかかわらずお腹の子に絵本の読み聞かせをすることには、どんな意味があるのでしょうか。最近の乳幼児精神保健分野の学術研究によると、出産が間近になった胎児の脳は、かなり発達していて、母親の心理状態を敏感に感じ取っていることが明らかになっています。例えば、DVや戦争・災害などで、母親が恐怖にののいたり極度の緊張状態にあったりすると、胎児は全身でそれを感じ取り、脳が萎縮して成長が一時的に止まってしまうというのです。出生後の乳児期になると、乳児の脳への影響は、より深刻に

なります。

胎児に絵本の読み聞かせをするとき、母親の声のトーンは、あたたかくやさしいものになりますよね。しかもお腹の子に向かって声をかけるのですから、胎児への声の響きは、より伝わりやすいです。さらにそういうときの母親の心理状態は落ち着いて安定したものになっています。胎児にとっては、とても安定した心地よい状態に包まれることになります。その心地よさは、胎児の脳に記憶されます。胎児に毎日にモーツアルトのやさしい曲を聞かせるとよいというのと同じです。

こうして出征した乳児は、ひと月ほどして母親が体調もよくなって読み聞かせ（ブックスタート）

を始めると、胎内にいたときに感じた母親の声のやさしいトーンとその心地よさを思い出し、読み聞かせに割と早くなじんでくるのです。

私はこのような胎児への読み聞かせを、「マタニティブックスタート」と呼んでいます。小林さんのおたよりは、「マタニティブックスタート」の成果を示すすばらしい事例と言えらると思ひます。